



地域農林リサーチオフィスの活動紹介

昨年（平成21年）4月から、京都府立大学と京都府農林水産技術センターが共同で府内の農業・農村に関する研究を実施する機関として、「地域農林リサーチオフィス」を設置しました。同オフィスには、府大：桂明宏准教授（生命環境科学研究科）、農林水産技術センター：今井正憲主任研究員・中西宏彰副主査の3名が配置され、府大と農林水産技術センターの併任になっています。

リサーチオフィスでは、主として社会科学的な観点から京都府の農山村が抱えている諸問題について調査研究したり、農林水産部が実施している施策を検証するための調査を行うなど、現場志向・政策志向の調査研究を主要な業務としています。

例えば、昨年は国の中山間地域等直接支払制度が改定されることを受けて、集落協定が継続していくための社会的条件に関する研究を行い、取り組みモデル事例集を作成して府政や市町村ならびに各地域に役立ててもらいました。今年は、中山間地域における飼料米生産の定着・拡大条件に関する研究を行っています。この研究は、リサーチオフィスが近畿各府県の試験研究機関をコーディネートして、農林水産省の競争的資金を獲得することで実現した機関連携型の研究です。



新しい中山間等直接支払いの柱の一つである広域連携の先進事例を調査し、広域連携協定の成立条件を検討しました。（写真は山口市阿東）



このようなコーディネート機能もリサーチオフィスの重要な役割の一つです。また、農林水産業の技術開発や農山村の社会経済問題、それらと密接な関係のある食や環境をめぐる諸問題に関する分野で、府立大学と府の研究機関との協力関係の構築をお手伝いしたり、様々な社会的ニーズと研究者をつなぐリエゾン機能を果たしています。

（写真）今年度、福知山市三岳地区の棚田で、飼料米直播栽培実験を中丹振興局・地元農業生産法人とともに実施しています。リサーチオフィスでは飼料米直播栽培のコスト分析を担当しています。

目次

地域農林リサーチオフィスの活動紹介……………	1	府立総合資料館との連携……………	10
地域貢献型特別研究（府大ACTR）研究紹介……………	2	産学公連携拠点施設の整備……………	10
京都政策研究センターの活動紹介……………	4	高校生のためのプログラム・リカレント学習講座 ……	11
行政との連携		トピックス……………	11
長岡京市との連携……………	5	学生奮闘記……………	12
府立大学に期待すること（長岡京市長）……………	5	イベント情報……………	12
学部・研究科の取り組み……………	6		

地域貢献型特別研究（府大ACTR）研究紹介

府・市町村の行政やNPOをはじめ、産学公の多様な連携・協力によるプロジェクトチームが、府域の課題に対応し、地域振興や文化・産業の発展に貢献する調査研究「地域貢献型特別研究」（ACTR(※)）を実施しています。（※「ACTR」とは、Academic Contribution To Region の略）

ACTRプロジェクト「植物園の有する公益的機能の多面的評価」

公共政策学部 公共政策学科 佐野 亘 准教授

本研究は昨年度より京都府立植物園との共同研究としてスタートしました。一般にはあまり知られていませんが、単なる公園とは異なり、植物園はさまざまな機能を有しています。京都府立植物園も貴重な数多くの役割を北山地域（さらには京都全体）で果たしています。ただ、残念ながら、そうした多面的機能はあまり知られていないため、ともすると単なるひとつの公園として捉えられがちです。そこで、わたしたちは、植物園の有する多様な公益的機能を洗い出し、その多面的評価をおこなうことで、府民に対して、植物園の意義や重要性をわかりやすく伝えることができれば、と考えています。メンバーは、生命環境科学研究科の先生方6名、京都府立植物園の金子園長、そして公共政策学部の佐野です。佐野がとりまとめをおこなうとともに、最終的に、おおまかなビジョンのようなものを示唆する予定です。実際にいくつかの研究が進行中ですが、紙幅の都合もあるので、ここではひとつだけ紹介することとめます。生命環境科学研究科の福井亘講師は、植物園に集まる「トリ」の研究をされています。その研究によると、他の植物園などと比較して、京都府立植物園にはより多くの鳥類がいるとのこと。糺の森から鴨川を通過して植物園にいたる「緑の回廊」のなかで、さまざまな生物が行きかい、そこでの生物多様性が鳥類の多様性を支えているわけで、植物園が京都のなかの重要な「緑」（＝生物多様性を維持する場）であることがわかります。ほかにも博物館的機能や学術的価値、さらには景観的な意味など、いくつかの視点からの研究がありますが、その成果は1月23日に京都府立植物園でおこなわれるシンポジウムでお披露目するつもりです。ぜひご参加ください。



鳥類の調査中

「米粒の科学的評価法に基づく京都米の食味向上技術に関する研究」

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 遺伝子工学研究室 増村 威宏 講師

今年の夏は猛暑となり私達も地球温暖化の影響を実感したところですが、夏場の高温化はお米の実りにも悪影響を与えます。イネ種子は成熟時期に高温にさらされると、米が白く濁るなどの品質低下が発生し、一等米比率の低下をもたらし、米価を下落させます。夏場の高温化が進む中で京都府産米の評価を維持、向上していくために早急な対策が求められています。平成21年度に実施した本研究では、京都府立大学が開発した米粒の科学的評価技術を用い、京都府農林水産技術センター・農林センター（作物部、丹後農業研究所）、丹後米改良協会、京都府農業協同組合中央会、京都米振興協会と協力し、高温被害粒と非被害粒の比較による米品質低下の発生原因を調査することを目的とし、以下の3項目の取り組みを行いました。

1. 府の農業機関、農業団体が協力し、高温下での良食味米栽培のための生育相の解明、生育診断を行い、経年変化などのデータを蓄積しました。また、研究所や現地の水田より科学的分析用の試験米を収集しました。
2. 府立大学では、現場から提供された試験米について、生化学的分析、免疫組織観察などの評価技術を用い、高温被害粒と非被害粒の違いを調査しました。
3. 上記の関係機関で得られた成果について、情報を共有する場を設け、温暖化による米の品質、食味低下への影響について、多面的に解析しました。

以上より、高温による被害粒では、デンプン粒の形成能力が低下するという知見に加え、タンパク質が蓄積するタンパク質顆粒が小型化し、米粒内の分布に影響が生じることが初めて明らかになりました。その成果は、平成21年12月11日（金）にホテルセントノーム京都で、公開講座「丹後産コシヒカリの美味しさの秘密」を開催し報告しました。その模様は、同日のKBS京都テレビ「京プラス」にて報道されました。また、22年1月には京都府広報番組「旬感☆きょうと府」においても公開講座の内容が紹介されました。



平成21年7月、8月に実施した圃場検討会
（京丹後市与謝野町）

京都府北部の生物多様性の保全戦略策定にむけた希少生物と地域生態系の把握、ならびにその体制整備に関する研究

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 応用昆虫学研究室 吉安 裕 教授（研究代表）

京都北部地方には砂浜海岸と里山環境、それに希少な野生動物が生息する冠島など豊かな生態系がある。これらは主に地元愛好家により調査されている。しかし、その情報は断片的で環境保全施策へ反映される仕組みが十分ではない。平成20年度より、海浜性植物のDNA多型解析、オオミズナギドリ繁殖生態、ならびに昆虫類の絶滅危惧種と要注目種の分布状況の調査を市民と協同して実施し、地域の智の集積と体系化を担う大学ならではの研究、そして地域との情報共有の仕組みづくりとして本事業を遂行している。研究は経済的見返りを直接的に府民にもたらすものではないが、これらを調査し、公表することで府民の京都府の自然に対する認識を新たにし、自然環境保全への機運をもちたて、また京都府が現在進めている自然保護関連施策立案に貢献することができる。



写真1 由良川でのバッタ探索

本年は体制整備に関わる、地域における活動として、2つの取り組みを行った。

1. 平成22年8月7日と翌8日に、市民の皆様とともに、京都府北部のバッタ類の調査を開始した。初日は舞鶴西公民館において『京都府北部のバッタ類による地域環境の調査』の意義や方法について、本学生命環境科学研究科の教員（中尾）が解説し、共同調査のキックオフを行った。これには、新聞記事などによる呼びかけで11名の市民の皆様に参加いただいた。翌日午前には加佐公民館主催の行事『田んぼや草むらの生き物観察会』の一環として、約30名の市民の皆様とともに由良川河川敷の草原性バッタの種構成を調査した。絶滅危惧種を探索するこの活動にはテレビ局も注目した（写真1）。午後には由良ヶ岳の山麓に調査場所を移した。樹林性バッタの地理的変異の解析は3年計画であるが、今日までに約10名の市民の皆様から30匹以上の試料確保の連絡を受けている。それら貴重な標本は本学に保管され、市民の皆様とともに解析に供し、研究結果は地域の方々の手により公開される予定である。

2. 平成22年9月30日に、来年度から統合する舞鶴市立神崎小学校と八雲小学校の学校間交流事業『舞鶴市神崎海岸交流自然環境観察会』『～砂浜海岸の貴重な生物の観察会～日本で未記録の珍しい昆虫と海浜の奇妙な動植物をみつけよう!』を共催した（写真2）。両校の児童と先生4名、舞鶴市の生物研究者3名、ならびに本学生命環境科学研究科の3教員（中尾、大迫、吉安）が参加し、西神崎の海浜に生息・生育する動植物の観察を通じて、その特徴や価値、ならびに様々な生物の調査法について学習した。統合によってなくなる小学校の校区にすばらしい自然環境のあることを伝承する貴重な機会となった。



写真2 神崎海岸での昆虫採集

高付加価値大豆を利用した京都府食品産業の新たなブランド展開

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 食事科学研究室 松井 元子 准教授

大豆は、京都のおばんざいの材料として、煮豆、豆腐、卵の花（おから）、湯葉、豆乳、厚揚げ、ひろうすなどに加工・調理し供されることから、「京都の食文化」を担う上で重要な位置を占めています。そこで、京都府農業水産技術センターが「丹波黒大豆」から変異により種皮色が白色となった大豆の育成に成功したことを受けて、私共の食事科学研究室では、平成21年度府大ACTRのご支援を得て、この新しい高付加価値大豆の美味しさについて研究を始めました。この新しい高付加価値大豆と従来品種「オオツル」「丹波黒大豆」の子実について、大きさ、色、吸水率、煮た時の物理的特性（テクスチャー）等を測定・比較、評価し、この高付加価値大豆の味、食感について調理科学的特性を明らかにしました。さらに、京都府食品産業協会傘下の需要者の試作加工品（豆乳や豆腐、煮豆等）について、物性評価、官能評価等を行い、その優位性や美味しさの要因を科学的に明らかにしました。これらの基礎資料を基にして、現在、当研究室で、おいしい大豆加工品の新製品製造のための商品開発を行っております。試作品は、公開講座（平成22年1月28日、京都府立大学）やフードテック2010-国際食品産業展2010大阪（平成22年9月7日、インテックス大阪）において、試食していただき好評を得ることが出来ました。今年から京都府内でこの大豆の栽培が始まっており間もなく収穫を迎えます。この美味しい大豆を用いた新商品を早く府民の皆様々に味わっていただきたいと思っております。



高付加価値大豆で作った美味しい試作品

京都政策研究センターの活動紹介～地域の課題解決のために～

公共政策学部 公共政策学科 奥谷 三穂 准教授

京都政策研究センターは、平成21年9月に、政策研究のシンクタンクとして設置されました。京都府政の重要課題に関する政策研究、地方公共団体等との共同研究、京都府職員の政策立案能力の向上などの取り組みを進めながら、研究成果を広く府民の皆さんや社会に還元していこうというものです。設立から1年が経ったところであり、まだまだ試行錯誤なところもありますが、京都固有の自然や文化といった強みを生かして、地域の課題解決や活性化が図られるよう研究を進めているところです。現在進めているいくつかの研究や取組を紹介します。

1. 京都府との連携による協働研究

(1) 地域力再生・活性化のための政策事例研究

平成19年度から進められている京都府の「地域力再生プロジェクト支援事業交付金」を活用した地域の特徴的な事例について調査を行い、府の交付金による成果と個々の事業が地域の活性化にどのように結びついているのかといった視点から研究を進めています。例えば、地域の過疎化・高齢化の問題の解決に当たっては、NPOの取組を中心として、行政や企業、地域住民をどのように巻き込んで進めるのか、また、農林業、環境、福祉、産業といった分野を超えた政策統合のあり方などについても研究を進めています。

(2) 里力再生2nd Stageにむけた研究

平成21年度から進められている京都府の「共に育む『命の里』事業」の対象地域の中から特徴的な地域を対象として、これまでの施策の効果やそれらによって地域の課題がどのように解決されてきているのかといった視点から研究を進めています。この事業では、農業生産基盤整備、生活環境基盤整備などのハード整備事業の他、人づくりを進める「里力再生事業」や大学との連携による「ふるさと共援活動支援事業」、集落全体の課題解決のお手伝いをする「里の仕事人」の設置など、多彩な施策が行われていますが、各地域の事業効果を比較するなど、地域の特徴を生かした施策のあり方などについて研究を進めています。



宮津市上世屋 過疎集落の棚田を守る取組

(3) 持続的発展可能な京都ならではの地域環境政策に関する研究

環境問題の根本的な解決を進めていくため、京都府を中心として昨年度「京都環境文化学術フォーラム」が京都府立大学、京都大学、総合地球環境学研究所などとともに設立されました。世界的な視点から地域の自然と文化を基盤とした発展のあり方をテーマに、毎年2月16日の「地球環境の日」前後に国際フォーラムを開催していくこととしています。本学では本年度、特に、「環境、福祉、文化の融合」をテーマに研究を進めているところです。京都には古より、「自然の中で生かされている」といった自然観や、「しまつ」などの暮らし方の知恵が残されています。京都から世界に向けて、新しい発展概念と政策の発信ができればと思っています。

2. 連続自治体特別企画セミナーの開催

京都府や市町村など自治体職員を対象として、政策のあり方や行政施策の企画ノウハウなどについて、学識経験者を招いたセミナーを開催しています。日常業務を少し離れて、大所高所から考えていただける場としています。年間5～6回の開催を予定しています。

*今後の開催予定 11月25日(木)午後3時～5時 (京都府職員研修・研究センター・大研修室)

講師：木村俊昭氏 (農林水産省大臣官房政策課企画官・地域活性化伝道師)

「京都政策研究センター」の活動は、まだまだこれからといったところです。ホームページなどを活用して研究成果を発信していきますので、ご意見、ご提案などをお寄せいただければ幸いです。

*ホームページアドレス：<http://www.kpu.ac.jp/> ▶ 京都政策センター

行政との連携

長岡京市との連携

本学と長岡京市は、これまでの環境保全、教育、健康福祉に関する多方面の連携実績を踏まえ、連携協力を更に進めるために、平成22年3月12日に包括協定を締結しました。

この協定は、本学と長岡京市が、様々な分野において連携協力することにより、地域社会の発展と人材の育成を図ることを目的としています。

府立大学に期待すること

長岡京市長 小田 豊



「すくすく育て！心と体のびやかに、食でつながりがおかきょう」これは、本市の食育推進計画のメインテーマであります。

本市では、本年、これまで学校教育、農政、保育、保健の各分野で取り組んできた食育を、“長岡京市食育推進計画”として総合的に策定することになりました。

保健分野では、昨年より食育推進計画を策定するための基盤研究を府立大学と共同で行っていますが、今年3月に府立大学との連携協力包括協定が結ばれたことにより、さらに連携が進み、保育分野や多世代の食育に関する調査に取り組むことができるようになりました。市民の食育に関する意識や現状を把握することができ、より本市の地域特性を生かした計画を策定できるものと考えています。

今後も府立大学がもつ優れた研究活動や知的財産などを、様々な分野で取り入れることにより、行政の施策の視野が広がり、本市のまちづくりが一層進むことを期待しています。

地域における食育の推進による健康づくりをめざして ～長岡京市からの実践～

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 健康科学研究室 東 あかね 教授

赤ちゃんからお年寄りまでの住民さんの健康づくりを支援する職種として、行政栄養士があり、本研究室の卒業生の主要な進路となっています。長岡京市には、従前より2名の管理栄養士が配置されており、食による保健活動に熱心に取り組んでおられることは京都府下でも評判でした。このたび、包括協定を締結したことをきっかけに、連携を深めさせていただくことになりました。

長岡京市といえば、筍です。今春には、研究室の2名の学生と共に筍掘りに出かけ、その筍を利用した若竹煮を、本学1回生対象の朝食会に供しました。ふかふかの土の中から丁寧に掘り起こし、数時間以内に茹でた筍は柔らかくて歯触りがよく、大変好評でした。

研究としては、京都府立大学地域貢献型特別研究と文部科学省科学研究費の助成を得て、学部生、大学院生、教員、学外研究者がチームを組んで「胎児期からの健康づくり」に取り組んでいます。昨年、長岡京市の妊婦さんの食生活調査を実施させていただきました。この調査にご協力いただいた妊婦さんが出産された赤ちゃんが3歳になるまで、やせや肥満などの栄養状態とアレルギーについて継続して追跡する予定です。さらに今夏は長岡京市の全保育所に通う5歳児の食生活調査にもご協力をいただきました。これらの調査研究は、地域で活躍する保健師や管理栄養士から直接、公衆栄養活動を学ばせていただく貴重な機会となっており、大変有難く存じます。

同様の調査は精華町、南丹市、丹後地域においても実施しており、お互いの地域と比較検討することによって、それぞれの地域の実情に合わせた食育や保健活動を推進していただき、市民・府民の健康と幸せづくりにお役に立てればと願っています。



「この竹林から朝食会の筍を掘り出しました。」

学部・研究科の取り組み

文 学 部

「祇園祭から世紀末ウィーンまで—京都のなかのドイツ文化」

欧米言語文化学科 青地 伯水 准教授

文学部公開シンポジウム・京都シリーズ第2弾「祇園祭から世紀末ウィーンまで—京都のなかのドイツ文化」を開催！

平成22年3月13日(土)、京都府立大学合同講義室棟の第7講義室において、上記のシンポジウムを開催しました。特に今回は、大阪市立大学名誉教授で財団法人・祇園祭山鉾連合会理事長でられる深見茂先生にご講演をいただきました。

深見茂先生は19世紀ドイツの市民文学の研究者ですが、ドイツの市民社会が産業構造の急速な変化と政治における中央集権化により没落していく過程と、明治以降の社会組織の西欧化のなかで祇園祭が被った変容を重ね合わせて議論をされました。そして祇園祭の市民性にこそ、住民自治による絶対的自由への可能性が秘められているとの自説を展開されました。

講演は、次の文学部共同研究員・吉岡いずみ「女性と社会—ドイツの運動と京都」、同・浅井麻帆「ウィーン分離派と京都」、文学部講師・横道誠「タウトの『桂回想』—水墨画とドイツ語テキスト」の基調をなすものでした。明治以降の日本(京都)はドイツ受容の中で拙速な近代化を果たし、古層にある日本(京都)の文化を破壊してしまいました。その結果、大正期・及び戦前昭和期のドイツ受容は、京都とドイツを超えた「第三の日本(京都)」を目指す取り組みであったことが、これらの報告で明らかになりました。この後、この結論が文学部准教授・青地伯水の司会によるパネル・ディスカッションにおいて確認されました。

ご来場くださいました約100名の皆様ありがとうございました。なお、この成果は来年3月に『京都のなかのドイツ』(春風社)として刊行されますので、こちらもよろしくお願いいたします。



文化遺産の調査研究を通じた地域貢献の取り組み —宇治市・八幡市を中心に—

歴史学科 菱田 哲郎 教授・東 昇 准教授

平成20年度に始まった大学の改組にともない、文学部歴史学科に文化遺産コースが置かれることとなった。歴史学の応用部門として、歴史的な遺産を実地に研究することを主たる目的としており、歴史学、地理学、考古学、文化情報学の各専門分野の教員によって構成されている。

その研究の手始めとして、宇治市歴史資料館と連携したACTR「南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究」を平成20年度に実施し、その成果を『京都府立大学文化遺産叢書』第1冊として刊行した。市民向けには平成21年6月27日に「宇治の文化遺産・景観から歴史へ」というタイトルでシンポジウムを宇治市でおこない、多くの市民の皆さんに成果を伝えることができた。具体的には茶園についての歴史地理学的な研究成果、文化的景観としての宇治の街並み、近世石燈籠の調査成果とそれにもとづく宇治の名物研究、さらに平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩を材料とする音楽遺産の研究である。身近な文化遺産を歴史の流れの中に位置づけ、市民と地域の歴史との対話を促す契機になったのではないかなと思う。なお本年度は、宇治市民大学運営スタッフ会と本学歴史学科との連携事業として、「古代の南山城」をテーマに連続講義を宇治市で実施中である。

平成21年度からは八幡市を中心にACTR「地域文化遺産を活用するための調査・記録・情報化の研究—八幡市域を中心とした文化情報学研究の確立—」を実施しており、本年度も継続中である。昨年度は市内から発見された古文書の調査、神社の石造物や大坂街道の景観の調査などをおこなった。これらはいずれも学生、院生とともに実施しており、地域の現状を知る上でも貴重な機会となった。

その成果は『京都府立大学文化遺産叢書』第3冊として刊行した。2年目の今年度は、引き続き各調査を続けているが、地域の方へ成果を報告する機会を積極的に設けている。7月には八幡市の念仏寺で文書調査の方法について院生とともに報告し、9月には八幡の歴史を研究している会で絵図の読み方を中心にお話した。それぞれ40人ほどの集まりであったが、参加者の地域への熱い思いが伝わる会であった。今後も地域のために、調査、成果報告ともに進めていきたいと考えている。



八幡市念仏寺での報告会

公共政策学部

「市民に政策力を」

公共政策学科 窪田 好男 准教授

私の関心は、よい政策とはどのようなものかを明らかにすること、そして、よい政策をつくり、よくない政策を見直したり終了したりする方法を考案することにあります。公共政策学では政策形成（または政策デザイン）、政策評価と呼ばれる分野です。また、こうした知識を持ち、方法を身につけた人、いわば政策力を有する人を社会の中に増やしていくための教育・研修手法やプログラムの開発にも関心があります。公共政策学というと、政治学・行政学や経済学や法律学などを使って政策提言を行う学問というイメージが強いと思いますが、公共政策をわかる・つくれる人材を育てていくことも重要な役割です。

政策形成も政策評価も、教育・研修手法の開発も地域における公共政策の実践との関わりなしに研究することは困難です。そこで、総合計画や地震防災対策推進などの個別計画の策定、教育振興基本計画の策定、特定の政策課題に取り組む施策・事業のつくりかたの研修、自治体や教育委員会の評価システムづくりの支援や外部評価といったことについて、京都府はもちろん、府下の市町村、府外の自治体等に関わっています。

最近取り組みはじめたのは、経営学などの教育で活用されているケース・メソッドを公共政策学に導入すること、また、政策力が身につくカードゲームやボードゲームを開発することです。政策力を身につけるには正しい理論を学び、現場でのリアルな経験を積むことが必要なのはもちろんですが、こうした手法もまた必要かつ有効だと考えています。

また、今年度から専門演習で地方議員を対象とした聞き書き調査を行っています。「地方主権」の時代、地方議会・議員は非常に重要であるにもかかわらず、その実像は必ずしも明らかにされてこなかったからです。

このように、いろいろなことに取り組んでいますが、地域と協働して一つ一つ実現させていきたいと思っています。



ゼミにて

「少子高齢化・未婚化・高失業率社会における障害者支援政策を考える」

福祉社会学科 中根 成寿 准教授

私の研究関心は、障害者が地域で暮らすための制度・政策の追求である。こう話し始めるとおおよそ半分の人が私の研究への関心を失うことを体験的に知っている。それぐらい「障害者」と呼ばれる人々は「外国人」と同じぐらいの意味づけなのだろうと思う。

では「障害者」とはどのように定義されるか？それは時代や社会環境によって変わる。高齢化によって身体障害者はどんどん増えているし（身体障害者の半分は65歳以上の高齢者）、少子化にもかかわらず、特別支援学校に通う子どもたちは増え続けている。障害者の客観的定義をすることにあまり意味はない。

生活の困難を抱えたら障害者、としてしまえばすっきりする。この場合の障害は貧困や失業、うまく働けない人、長いこと病院に入院していた人、家族を介護しないといけない人など、本人に医学的な病気がなくても「社会によって生活が障害されている」と捉えることになる。

人が生活していくには金と世話をしてくれる人が必要である。一人で全部まかなえる人もいれば、出来ない人もいる。家族という仕組みは実に便利で、金と世話をしてくれる人を一緒の場で相互に交換できる。だから家族は今なお、貧困や失業、介護のリスクから個人を守る便利な制度である。ただ、家族は生身の人間で構成されるから、年をとる。メンバーが交代していかないといままで出来ていたことが出来なくなる。またもっと単純に、家族がいない人はどうするのだ。

これまでいかに家族が生活上の困難を吸収してきたか、少子化・高齢化・未婚化・高失業率社会になって実によくわかった。自分一人で自分の世話ができず、仕事もなく、家族もいない。その状況でも人が生活することを支援するには、けっこういろんなことを考えなければならない。私の研究は、身体が元気でなくても、家族がいてもいなくても、金と世話をしてくれる人を十分に用意できる社会制度、である。ベーシックインカムとかダイレクトペイメントはその一つの可能性として強い関心を持っている。

生命環境科学研究科

「京都府農耕地土壌の土壌バンクの創設と健全性評価―“同じ川を2度渡る”ために―」

応用生命科学専攻 土壌化学研究室 矢内 純太 准教授

ギリシアの哲学者ヘラクレイトスは、万物は流転することの例えとして、“同じ川は2度渡れない”と言ったとされる。しかし我々は、万物は流転するがゆえに、時として“同じ川を2度渡りたい”と思うことがある……

土壌は、農業生産の基盤であるとともに陸域生態環境の基盤でもあり、安心・安全な食料生産のためにも、我々人間を含めた全ての陸上生物の生存のためにも、不可欠なものである。特に、農耕地土壌を健全に保つことは、我々の「食」を守るとともに、我々の「環境」を守ることに直結している。京都府において、農耕地は府の面積の約5%を占めており、京都のおいしい米や伝統的な京野菜など各種食料を生産するための、かけがえのない社会的資本となっている。そのため、長期的な視野に立って食の安全性を守るためには、時間的にも空間的にも長いスパンで農耕地土壌の健全性を評価できるような体制を確立することが重要である。

このような認識の下、我々は、京都府における農耕地土壌の健全性評価と土壌バンクの創設という取り組みを、京都府農林水産技術センター農林センター（以下センター）と共同で行ってきた（平成20年度、21年度の府大ACTR事業）。



土壌試料の新しい保管容器への詰め替え

この取り組みではまず、京都府の農耕地土壌を時空間的に集めて保管する「土壌バンクの創設」を試みた。すなわち、国の事業として第2次大戦後から継続して行われてきた農耕地の「地力保全基本調査」「土壌環境基礎調査」「土壌機能実態モニタリング調査」などで府内各地から集められた農耕地表層土のうち、1965年以降に集められセンターで保管されていた約2千点を確認・整理するとともに、それらを長期保存に耐え得るポリ保管容器に詰め替える作業を行った。その後、それらを京都府立大学へ移送し、大学内に設置した保管庫へ収納した。

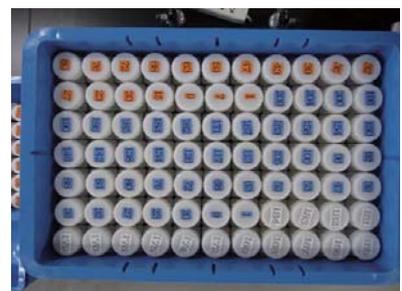
これにより我々は、京都府農耕地土壌の状況を、過去45年にわたり京都府全域で振り返ることができるようになった。例えば、ダイオキシンや過剰な重金属類などが問題となった場合に、それらの土壌中での濃度がどのように推移してきたかを、過去に遡って調べることができる（本来は不可能であるにも関わらず）。土壌肥沃度の指標である土壌養分や有機物の含量などについても同様のことが可能である。従って、過去の土壌環境を改めてモニタリングできるという意味で、“同じ川を2度渡る”ことができる体制が整ったと言える。

そこで、これら土壌試料を用いて「農耕地土壌の健全性評価」を重金属について試みた。すなわち、収集された土壌試料の重金属濃度－1 mol/L塩酸により抽出される亜鉛（Zn）、鉛（Pb）、ニッケル（Ni）、ヒ素（As）、銅（Cu）－を、誘導結合プラズマ発光分析装置（ICP-AES）を用いて調べた。その結果、京都府農耕地土壌の各重金属濃度は、過去においても現在においても基本的には汚染が問題となるレベルではないことが確認された。しかし、一部の元素の濃度上昇が若干認められたため、「食」や「環境」を守るためには、今後も調査を継続することが大切であると考えられた。

今回の研究成果は、何よりもまず京都府における現在の食料生産を安心・安全に行うために役立つものと考えている。また、これら土壌試料は、現在知られていない土壌関連の新たな問題が今後生じた場合にも過去に遡って調べることができるよう、データベースとともに長期的に保管する計画である。さらに、この試料を用いて過去のデータを十分に集めれば、将来を適切に予測することにも利用できる。その意味で、本取組みは、現在のみならず将来の京都府民にとっても役立つものであると確信している。



土壌試料の整理・保管の作業の様子



土壌バンクの様子

「建築の耐震性能と構造設計を向上させる」

環境科学専攻 建築構造学研究室 内田 保博 教授

建築には、地震や台風等の自然災害に対して人命や財産を守る役目があります。そのためには、建築の構造が安全で優れた性能を持つように、設計・施工されなければなりません。建築構造は建築の骨格をなす重要なものであり、その最低限の性能は法律によって保障されています。

我が国は地震が多いので、建物には特に耐震性能が要求されます。そこで、本研究室では、構造物が崩壊に至るまでの挙動や構造物の耐震性能について調べ、建築構造の設計式の提案を行ってきました。最近は、鉄筋コンクリート柱のせん断破壊に関する研究や繰返し水平力を受ける鋼骨組の変形能力に関する研究を行っています。1995年の兵庫県南部地震では多くのコンクリート系建物がせん断破壊により倒壊しています。せん断破壊時の抵抗力を予測し、耐震診断や改修に役立てることは大切です。また、地震力等の繰返し水平力を受ける構造物が壊れるまでどの程度変形して、地震エネルギーを吸収できるかは、耐震設計上重要です。

実験において自分達でコンクリートを練り、鉄筋を組み立て、型枠にコンクリート、鉄筋を入れて試験体を製作しています。試験体の製作や実験装置の組立てには、ものを作る楽しさがあります。作る過程で問題が発生したときは、皆で知恵をだしあって解決することがあります。また、実験により実際に柱などが崩壊していく挙動を見て学ぶことは、大変貴重な経験です。

今後は、今まで続けてきた研究を発展させ、建築構造の耐震設計、耐震性能の向上に貢献できるよう、教育・研究に取り組みたいと思います。



鉄筋コンクリート柱の実験

「室内空間（インテリア）計画学研究室」

環境科学専攻 インテリア計画学研究室 佐藤 仁人 教授

国土交通省が推奨している「200年住宅」に見られるとおり、集合・戸建にかかわらず住宅の長寿命化が図られています。その結果、住宅の本体は数世代にわたり耐力を保つことになり、そうするとその間に家族のライフスタイルの変化や、世代の交代あるいは住み替え等が発生します。つまり、住む人に合わせてリフォームがより頻繁になされるため、インテリアの計画はこれからますます大切になります。

ところで、今では当たり前のように使われているインテリアという言葉ですが、日本には最近までその概念はありませんでした。日本ではもともと内と外の境界があいまいな開放的住居に暮らしていたので当然かもしれません。インテリアという言葉が広く認知されるようになったのはインテリアコーディネーターおよびインテリアプランナーの資格ができた1980年代以降だと思います。その背景には、住宅にパネル構法や鉄筋コンクリート構造などが導入された結果、閉鎖的になったことにより内部空間意識が発生したこと、家具、家電、住宅設備機器などの大量のプロダクトの狭い住宅への流入により、住宅内部をトータルにコーディネートする必要性が生じたことがあります。そのためインテリアのジャンルは、建築的なことから、家具、空間形状・光・色・素材、照明、テキスタイル、プロダクト、人間工学など広い範囲に及んでいます。

インテリア計画学研究室ではこのうち、住宅・建築空間を対象として、空間形状・光・色・素材などの視覚的な環境と居住者との関係性を評価する研究を行っています。主な研究テーマは、1) インテリアの視覚的要素（色彩、照明、空間形態、表面仕上げ、等）が空間知覚に及ぼす影響の評価、2) 室内視環境が心理・生理に及ぼす影響の評価、3) 社会的情報量とインテリアの視覚的情報量の関係評価です。これらの研究を今年度は、教員1名、M2:2名、M1:1名、4回生:4名で行っており、居心地のよいインテリア空間をデザインするための方法を創造し発信することを目指して努力しています。



住居空間の光環境シミュレーション画像

府立総合資料館との連携

—『古典籍へようこそ』出版を記念して—

京都新聞朝刊紙上において、京都府立総合資料館所蔵の古典籍をわかりやすく紹介・解説したコラム「古典籍をあじわう」（平成19年3月～20年3月、隔週木曜日、25回）、「古典籍へようこそ」（平成20年4月～22年3月、隔週日曜日、46回）を文学部日本・中国文学科の教員を中心に連載してまいりましたが、おかげさまで好評をいただき、この度、一冊の本として編集・出版されることになりました。

京都府立大学文学部 日本・中国文学科、京都府立総合資料館 編
『古典籍へようこそ 京都府立総合資料館の書庫から』

11月1日発行 京都新聞出版センター発行 定価1,575円（税込）
新聞コラムに加筆し、古典籍を日本・中国文学のジャンル・年代によって再編集して、書誌データや写真、さらに古典籍年表などを加え、大変わかりやすく充実した内容となっております。ぜひお買い求め下さり、座右の友としていただければ幸いに存じます。

さらに、右の出版を記念して、府立総合資料館にて展覧会を開催いたします。

「古典籍へようこそ 一京都新聞連載の古典籍と細川幽斎の文芸一」

日時 開催中 11月28日まで（11月23日は休館）

場所 京都府立総合資料館 2階 展示室 入場無料

展覧会では、『古典籍へようこそ』に掲載される古典籍や、本学科教員によって昨年度調査研究が行われた府立総合資料館所蔵の新収追加貴重書の展示がなされます。（藤原 英城）



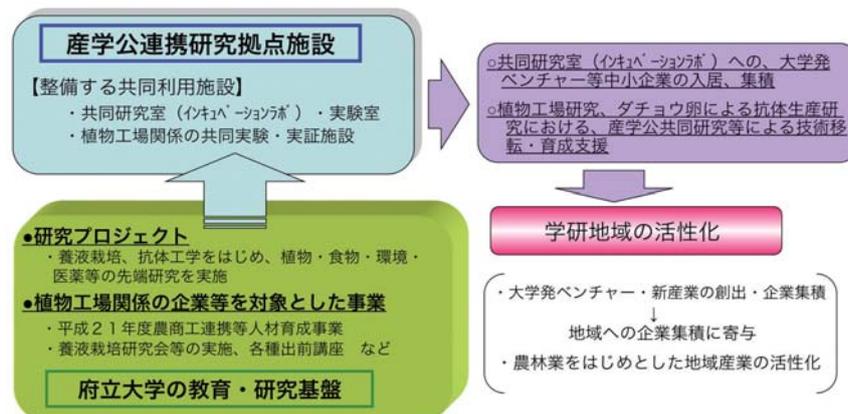
産学公連携拠点施設の整備

本学では、法人化に際して、地域に貢献する京都府立大学の総合窓口として、「京都府立大学地域連携センター」を設置するとともに、昨年度は、知的財産及び受託・共同研究規程を整備するなど、大学の研究機能と地域社会の研究課題とを結び、大学における研究成果を社会に還元するための産学公連携推進体制を構築してきました。

さらに、本年度は、「産学公連携研究拠点施設」の整備に取り組んでいます。

精華町の南田辺・狛田地区に設置した附属農場に隣接する旧「花空間けいはんな」の跡地を活用し、植物工場や抗体工学など、「健康、食、環境」に係る共同研究施設を整備し、関西文化学術研究都市の未来を担う産学公連携の新たな拠点として、大学発ベンチャーや新産業の創出・企業集積を推進し、地域の更なる活性化に寄与しようとするものです。

京都府立大学産学公連携研究拠点施設の概要



高校生のためのプログラム・リカレント学習講座

「高校生のためのプログラム 映像で学ぶ ドイツの歴史とエーリッヒ・ケストナー」と 「リカレント学習講座 エーリッヒ・ケストナーで学ぼう ドイツの文学と社会」を連続開催!

文学部欧米言語文化学科ドイツ語教室の教員が中心になって、上記の二つのプログラムを開催しました。8月8日(日)合同講義室棟第4講義室にて、13名の高校生を迎えて、日本学術振興会からの委託事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ」の一環として、ドイツの少年少女小説作家エー



ケストナーについて語る寺井研究員

リッヒ・ケストナーとドイツの歴史をかんがえるプログラムを開催しました。講義は寺井紘子共同研究員の「ケストナーの視線——大人のために、何を書いたか」と横道誠講師の「ケストナー作品の挿画と映画」の二本立てで、映像を駆使した講義に高校生たちは食い入っていました。またその二つの講義の間のクッキータイムに、青地伯水准教授がナチス時代に作られたケストナー脚本の映画『ほら男爵の冒険』を紹介し、大宮商店街のドイツ菓子「マウジー」のケーキがふるまわれました。みんなこちらにも食い入っていました。科研費の説明から始まり、「ドイツ文化未来博士号」授与で終わったこのプログラムは、

アンケートの結果からおおむね好評であったことがわかりました。なかには、「将来ぜひ研究者になりたい」と思ってくれた生徒さんもおられました。

9月18日(土)から土曜ごとに4週連続で10月9日まで、合同講義棟第2講義室にて、15名前後の来聴者を迎えて、エーリッヒ・ケストナーの文学とその時代について学ぶ講座を開きました。青地伯水准教授「作家エーリッヒ・ケストナーと映画『ほら男爵の冒険』」にはじまり、横道誠講師「ケストナー児童文学の工夫——ユーモラスに、イメージゆたかに!」、寺井紘子共同研究員「大人のためのケストナー——『フェアピアン』にみる爛熟の街ベルリン」と回を追うごとに盛り上がり、永畑紗織共同研究員「皮肉屋さんケストナーと風刺詩」の最終回を迎え、青地伯水准教授の「引き裂かれたドイツとケストナー」で無事話をまとめ、来聴者から盛大な拍手をいただくことができました。なお、この研究成果は『エーリッヒ・ケストナーで学ぶ ドイツの文化と社会』(仮題)と題して、来年度出版する予定です。どうぞ、こちらもよろしく願いをいたします。(青地 伯水)



ドイツ文化未来博士号の贈呈式

トピックス

★文学部史学科4回生の西田将也さんが初代代表を務める京都学生防犯ボランティア「ロックモンキーズ」が内閣総理大臣表彰、京都学生人間力大賞の準グランプリを受賞

自転車盗難撲滅キャンペーンやひったくり防止啓発パトロール等の活動が認められ、平成22年安全・安心なまちづくり関係功労者内閣総理大臣表彰、第7回京都学生人間力大賞(主催:社団法人京都青年会議所)の準グランプリを受賞されました。

★2009年度生命環境科学研究科環境科学専攻博士前期修了者 松田千怜さん、人間環境学部環境デザイン学科住環境学専攻卒業生 辻晶子さん(現在:生命環境科学研究科大学院生)が日本建築学会の優秀論文賞を受賞

日本建築学会で行われている学生を対象にした論文の表彰事業で、松田千怜さんが「優秀修士論文賞」を、辻晶子さんが「優秀卒業論文賞」を受賞されました。

★2009年度人間環境学部環境デザイン学科生活デザイン専攻卒業生 宮岡良衣さん(現在:生命環境科学研究科大学院生)が日本建築家協会「JIA全国学生卒業設計コンクール」で審査員特別賞を受賞

卒業設計「時間美術館」が、日本建築家協会(JIA)で行われている学生を対象にした設計の表彰事業で、優れた作品として受賞されました。

★2009年度人間環境学部環境デザイン学科生活デザイン専攻卒業生 山本俊光さん(現在:生命環境科学研究科大学院生)が連名で提案した作品が、みやこユニバーサルデザイン賞(主催:京都市)で奨励賞を受賞されました。(受賞者:山本俊光、多田悟司、三橋俊雄)

★生命環境学部環境デザイン学科3回生 添田朱音さんが、学生を対象にした設計課題の表彰事業「建築新人戦2010」(主催:建築新人戦実行委員会)で入賞されました。

★生命環境学部環境デザイン学科3回生 長島千紘さんがMOTTAINAI「マイボトルカバー」グラフィックデザインコンペ(主催:千趣会)で受賞され、そのアイデアが商品化されました。

学生奮闘記

政策ベンチャー事業に参加して

私たちは今年の4月から府の政策ベンチャー事業に参加させていただきました。この事業は、府の職員が京都府の抱える課題について自主的な調査を進めながら、新たな政策提案を行っていくものです。私たちは昨年度の公共政策実習Ⅰで府庁の職員の方と共同研究をしていた縁で、今回この事業に参加していました。府の職員の方との打ち合わせや調査を重ね、9月21日には府庁福利厚生センターにて報告会も行われました。

事業内容は、学生の街である京都の特色を活かし、大学食堂と生産者が連携した販売チャンネルをつくり、生産者の経営確立を図るために必要な政策提案を行うことでした。

調査や打ち合わせを進めていき様々な方のお話を聞くうちに、立場や職業は違っていても「地産地消を推進したい」「学生に美味しいものを食べさせたい」という思いを持った方がたくさんおられることに感激しました。現場で働く人たちの生の声を聞き、その思いを受けとめて、府の職員の方と一緒に京都の特色を活かした事業提案に携わったことは貴重な経験になりました。学生の街である京都で、学生が京都産米をもっと身近に感じ手軽に味わうにはどうしたらよいかについて、学生という立場だからこそ考えることが出来たのではないかと思います。

この事業に関連し、10月19日には南丹市八木町の農家から納入したお米を大学食堂利用者に提供しアンケート調査を行いました。大変なこともあります、実際に目と口で京都府産米を味わってもらい、その理解を深めてもらう企画になればと思っています。

(文：H. K 公共政策学部公共政策学科 3年生)



府大生協での取り組みのポスター

環境サークル・エコプロジェクト活動

私たちは普段、学内でエコキャップや牛乳パック、シラバス等の回収を行い、常にエコプロの活動をみんなに見てもらうことで、少しでも多くの人に環境について意識してほしい、という思いのもとで活動しています。

基本は学内での活動なのですが、今年からは他団体との交流を深めるために学外での活動も積極的に行っています。今年は鴨川での清掃活動やイベントでのゴミ拾いなどをしました。

学外での活動は、エコ活動が目的ではありませんが、たくさんの人たちとの出会いと交流を大切にしています。いろんな人と出会い、様々なことを知ることでエコプロの活動の参考にもなるし、自分自身も成長することができます。エコ活動に取り組みつつ、人との繋がりの大切さを実感できる貴重な体験がたくさんできます。

夏休みには集まったエコキャップをリサイクル工場に持っていき、工場見学をして、見学後にはお楽しみ企画でレジャー施設に行ったりと、楽しいイベントもあります。工場見学では実際に自分たちが集めたキャップがどうなっているか、京都中から出たゴミがどのようになって、何にリサイクルされていくか、など普段気になっていることを目の前で見ていただき、詳しく説明していただくととても勉強になります。

また、エコプロの伝統的なメイン活動として、学園祭でリユース食器を取り入れた『洗い皿』という活動があります。今年はこの『洗い皿』が本当に環境にいいのか、という疑問から環境負荷調査に乗り出し、実際に数値で検証してみたりもしました。このように、私たちは世間で言われている情報をうのみにせず、疑問に思ったことは調べて自分たちで納得のいく活動をしていこう、と日々頑張っています。

(文：N. A 文学部日本・中国文学科 3年生)



鴨川清掃の様子

イベント情報

文学部欧米言語文化学科シンポジウム「自然文化都市 京都—自然・人・歴史」

- 日時 平成22年12月18日 (土) 13時00分～16時30分
- 場所 京都府立総合資料館 講堂
- 共催 京都府立植物園、京都府立総合資料館、京都府立大学地域連携センター

府大広報 No. 165 一地域貢献特集号一 京都府立大学広報委員会 2010. 11. 20 発行

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 TEL. 075-703-5904 FAX. 075-703-5149

Email kikaku@kpu.ac.jp